

図書館だより

1988. 11. 1

第10巻3号

通巻107号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



古い映画館（サンドミエシュ）

呼びこみ

絵と文
國田 祐作

ずいぶん前から、映画が不振だといわれてきた。映画館に足を運ぶ人が少ない。平均すると、ひとりが年1回しか行かない計算になるという。客席に10人たらずということがよくある。寒さむとして、どんなに可笑しい場面でも、あのドツという笑い声が立たないのである。私は満員のコヤで空席を見つけるのをひそかな特技としていたのであるが、そんなノウハウは何の役にも立たなくなった。映画は夏休みと正月だけの季節商品になってしまった。

むかし、劇場の宣伝部に勤めていた。そこは芝居のほかに、2つの映画館を抱えていたから、芝居のポスターと映画の新聞広告を作るのが仕事であった。手の空いた時はコヤの前で呼び込みを手伝うこともある。正月三が日などは、新宿の盛り場は初詣で帰りの着飾った人々で溢れていた。打ち込み（業界用語で開演時間のこと）前から、手を打ち声を張り上げて客を呼び込む。それにはコツがあって、やみくもに怒鳴っていてもダメなのである。入ろうか入るまいかと決め兼ねている、そのきわにひと声かけて手招きすると、客はすっ

と吸い込まれる。その呼吸がベテランには分る。そして面白いように入るのだ。新米の私はぎこちなく手を上げ下げしているだけだった。超満員が続くと従業員に大入り袋が手渡された。

フェデリコ・フェリーニの「インテルビスタ」という映画は、映画全盛時代の撮影所風景を描いていた。撮影隊一行を、手に手に槍ならぬ、テレビのアンテナを持ったインディアンが襲う西部劇のパロディーシーンは、フェリーニのテレビへの敗北宣言であった。テレビの日常的リアリズムは、壮大な屋台崩しを見せ場にする大スペクタクル映画の夢を追い出してしまったのである。映画館そのものも次々に消えていく。神田神保町の東洋キネマは構成主義風のデザインで飾られた面白いコヤだったが、いまはスーパー店になってしまった。ポーランドのサンドミエシュという小都市でルネサンス風の映画館を見かけたが、これもテレビに逐われて閉鎖されたままであった。つぶれた映画館というものは、どの国でも同じ表情を持っている。（くにた ゆうさく 教養部教授）

北海道関係の資料収集計画

① 要旨と経過

昭和62年4月、新図書館が場所も新たに開館し、それに伴い「北海道関係の資料の充実を図ることを新図書館の特色とする」ことになりました。これは「大学開講科目の研究教育用図書の提供という大学図書館本来の性格による、専門図書への偏重をいくらかでも是正し、新図書館の施設設備がより効果的に利用されるため」また、北海道にある本学として「北海道の発展の歴史を学び、広く道内で生起する諸般の情勢に精通した学生を育成する」ことを目的とするものです。

以上の要旨に基づき、北海道関係の資料の選定・収集のため昭和62年9月に「北海道関係資料収集委員会」(教員8名、図書館職員6名 計14名)が発足しました。そして、63年9月には3階の開架書庫に専用スペースを設け初年度収集分の図書を配架しています。

② 北海道関係資料 収集対象と計画

〈対象地域〉

北海道は勿論のこと、樺太、千島、東北地方、沿海州、東シベリア等

〈対象資料〉

対象地域に関する

- (1) 地図*
- (2) 定期刊行物*
- (3) 各地方の定期刊行物
- (4) アイヌを含む北方民族関係資料
- (5) 視聴覚資料
- (6) 単行書*
- (7) 外国人による図書資料

(*主に収集する資料)

〈期間〉

昭和62年～昭和66年の5ヵ年計画

③ 委員会の構成

教員 菱川 善 夫	図書館長・教養部教授
小田 清	経済学部教授
山本 佐 門	法学部教授
早川 和 夫	工学部教授
堂垣内尚弘	工学部教授
藤 村 久 和	教養部教授
大江 敏 美	教養部教授
斎 藤 亨 治	教養部助教授
職員 斎 藤 和 夫	図書館事務長以下6名

以上のように北海道関係とはいえ、その対象は広く、5年という短い期間と限られた予算の中でそれらを収集するという事は、困難な作業であると同時に中途半端で終わってしまう危険性も含んでいるわけです。しかし、幸いなことに各学部より専門分野に通じた先生方に収集委員として参加していただいております。5ヵ年計画の終了時には、第二の「北駕文庫」に相応しい、本学図書館として誇ることの出来るコレクションとして、完成出来るものと思います。





「第36回日本図書館学会」 本学で開催

— 全国から200余名が参加 —

10月6～7両日、日本図書館学会 (Japan Society of Library Science) で主催する「第36回研究大会及び臨時総会」が本学を会場に開催され、延べ208名の参加者を得て盛会裡に閉幕しました。

主催団体である日本図書館学会は、全国の国公私立大学・短期大学図書館をはじめ官民立資料館・博物館、各種調査機関に勤務する図書館学の研究者・実務者など国内の図書館界では指導的に人々およそ600名で構成されております。

『図書館学』、耳慣れないことばのようですが、私達が現在「〇〇図書館」あるいは「〇〇文庫」と呼んでいる施設は外国はもちろん、国内の随所にあります。そして、これらの施設は年々質的に向上し、単に学問の領域にとどまらず人類文化の保存伝達やその発展に大きな役割を果たしてきております。

しかし、このような意義ある文化機関である「図書館」を研究の対象とする「図書館学」が生れたのは比較的新しいことのようにです。ヨーロッパでは19世紀のはじめ、日本では図書館学として公式に用いられたのは昭和25年以降のことです。

図書館は社会的機関でもあり、同時に教育機関でもあります。その機能は、図書・施設・読書の三つの要素の他に、優れた運営政策によっては

めて発揮されるものですから、図書館学は他の学問より一層実証的な経験科学であるといえます。そしてその理論と研究は、図書館が時代の進歩や発展に並行して絶えず社会に知的刺激を与える組織と機能をいかにして具備すべきかを理論的に体系化する、というところに図書館学研究の目標を置いております。

今大会では「日本における図書館行政とその施策」をテーマにしたシンポジウムと理論・歴史と技術・経営管理の2部会制で21本の研究発表が行われました。

その一部をご紹介しますと、

- 近代文書の資料組織論 — 目録法と分類法 —
- 情報欲求と「情報場」としての図書館
- 書誌の書名の構造分析
- ドイツ大学大綱法と大学図書館

など、斬界の研究者からの発表どれもが、活発な質疑応答のうちに終始いたしました。

なお、これらの研究発表要旨に若干の余部があります。関心をお持ちの方はお申し出下さい。

ご利用の皆さんには大変ご迷惑でしたが会期両日、本館・工学部図書室ともに臨時休館の措置をとって開催運営にあたりました。ご協力ありがとうございました。

— 北駕文庫初御目見得 —

北駕文庫 (明治以前の図書) は、本学の貴重本で、国内にその存在は知られていますが、一般の目に触れる機会はありませんでした。

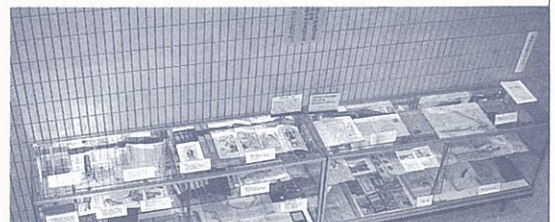
この度日本図書館学会開催に伴い、試みとして3万1千冊余の蔵書のうち50数点を展示公開しました。

これら古文書の時代を経ても薄れぬ鮮やかな色彩や、古式ゆかしい墨跡の妙は、見る人の心を引き付けて止まないものがあります。

レトロブームの昨今、古文書の美術的・歴史

的価値に触れると共に、内容にも興味が湧いてくるのではないのでしょうか。

これを機に図書館では、特色ある常設展示場を目指したいと思っております。



『歌の海』

不識書院 (1985)

菱川善夫

本にも美人と不美人がある。

この本は背中美人の本で、それが自慢の種となっている。

もちろん、この本をつくった不識書院主の手腕による。本ができあがって電話がかかってきた。こまかく神経のゆきとどいた装丁が気に入っていたから、私はさっそく御礼の言葉を述べた。不識書院主がいわく。「ひそかに自慢しているのは、この本の背中の中の美しいことです」と。

なるほど、帯を巻いた背筋のところ、小さく清潔な活字で、「歌の海」と印刷されている。それが白い本の背中をひきたてているではないか。私は、うーんと唸った。人間だって背中の中の美しいほうが好ましい。本も同じことなんだ、ということ、私は不識書院主から教わった。

『歌の海』は書きおろしの本ではない。もともと北海道新聞のコラム欄に連載されたもので、それを一本にまとめたものである。新聞のコラム欄というのは、息抜きの場所で、休憩室か談話室のような性格を持つものだ。だから本になる時も、できるだけ固い印象になることを避けてほしいと願っていたのだが、その希望が100%みたされて私は満足だった。

コラムの形は、短歌一首とその鑑賞で、400字づつめ原稿用紙一枚が、私の与えられたスペースである。短いから楽だと思ふかもしれないが、なかなか大変な仕事だ。いかにして余分なものを削り落としていくか、その削り方が勝負を決するのはいうまでもない。私も悪戦苦闘を強いられたけれど、おかげで、削り方の奥義を多少は体得することができた。

一滴の水滴にも宇宙が映っているように、一枚の原稿用紙が、どこまで世界を映すことができるか—それは知識の集積や技術だけで解決のつくことではない。人間の存在の重みがかかっている

のだ。ということ、私にはつくづく知らされることになった。

勝負はどの一首をえらぶかできまる。その一首の作品のえらび方、人間の存在の重みがうつしだされてくるから、私が一番頭を痛めたのは、どの作品をえらぶかである。一番最初に私がとりあげたのは次の作品である。

薔薇抱いて湯に沈むときあふれたるかなしき
音を人知るなゆめ 岡井 隆

「薔薇」は女の暗喩だけれども、この一首から始めて、〈愛〉のテーマで一貫させるのが私のねらいであった。恋愛はもとより、親子の愛、同性愛、自己愛、国家愛にいたるまでの、さまざまな愛の歌を通して、人間そのものの深淵に波紋を投げかけようと願った。歌や俳句は、病人か老人の趣味ぐらゐに考えている人が多いけれど、そんなたわいのないものではない。生き方や認識の表現であり、場合によっては、投石行為と同じくらい危険な行為でもある。そのことを知ってもらいたかった。

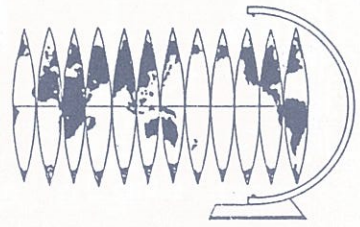
『歌の海』は、私自身の単行本としては、8冊目の本にあたる。論をたてる、という類のものではないので、どこからでも気軽に読んでもらうことができる。私にとって遊びの本、余技の本なのだが、読者にとっても楽しんでもらえる一冊になればさいわいなことだ。

(ひしかわ よしお 教養部教授)





西ドイツの教育事情



向田直範

西ドイツの教育制度の特徴は、教育行政が連邦政府（国）でなく、各州政府に委ねられていること、つまり教育の地方分権制と初中等教育について複数コース制が採られていることである。州によって違いはあるが、一般的な学校系統は以下のようになっている。

義務教育は6歳から始まりその期間は9年である。最初の4年間は基礎課程学校（Grundschule）で学び、それが終わった時点でおおよそ3つのコースに分かれる。将来大学へ進もうと考えている子供は9年制のギムナジウム（Gimnasium）へ進み、義務教育だけで終る子供はそのまま残って5年間の本課程（Hauptschule）を続ける。大学まで行くつもりはないが、義務教育以上の力をつけたい子供は5年制の実業中学校（Realschule）に進む。それぞれのコースへの進学者は、25%、40%、35%程度である。

大学入学を希望する者は、ギムナジウム終了時点で学校でアビトゥーア（Abitur）とよばれる国家試験を受けなければならない。これが大学入学資格となり、これに合格すれば自分の希望するどこの大学でも入学できる建前になっている。しかし、大学進学者の増加（戦前は5%に過ぎなかったといわれている）に伴って医学部、法学部のような人気学部では、入学定員に枠を設け、アビトゥーアの成績順に定員を満たすようになっているから、アビトゥーアの成績如何によって希望の専門分野、学部・学科に進めない場合がある（成績は1～6までの6段階評価でなされ、1が最も良く、4までが合格となる。医学部の入学には平均点1.4、法学部では1.9必要だとされている）。

法学部の基本的カリキュラムでは、講義・演習は8～9学期（1年は夏・冬の二学期に分けられ、大学によって若干の差異はあるが、概ね夏学期は4月～7月、冬学期は10月中旬～2月中旬迄であ

る）続けられ、筆記試験またはレポートがある。所定の学期を終了すると、第一次の国家試験（司法試験）を受験できる。しかし試験のチャンスは2度しかないので、大方の学生は確実性を期するために更に3～4学期程度勉強してから受験することになる。

第一次国家試験の合格者は、約70%で、この試験を合格することによって大学における法学教育は修了する（日本のような卒業証書はない）。

合格者は、裁判所、検事局または弁護士事務所等において修習生として2年半の実務修習を経験し、その後、第二次国家試験を受けなければならない。第二次国家試験の合格率は約90%で、合格自体はそれほど難しくないが、成績が優および良以上の合格者（50%）にとつてはともかく、成績が可で合格した約40%の者にとつては、就職難がついてまわる。

ドイツの法学部は、日本とは違い法律のスペシャリストの養成機関であり、単純に日本とは比較できないが、日本の大学卒業にあたる第一次国家試験の合格者の年令が26～27歳で、さらに2年半の実務修習があり、最終的には30歳前後にならなければ就職できないという点に、ドイツの学生の生活の不安定さが窺えよう。

このような状況は、多かれ少なかれ他の専門分野にも共通しており、アビトゥーア合格者の約40%が大学に進学せず職業教育を受けて就職するようになっているという事実が、このことを表しているように思われる。

（むかいだ なおのり 法学部助教授）

*帰国後2年を経過し記憶が定かでない部分があったので、以下の文献を参照した。併せて読んで頂きたい。子安美知子「シュタイナー教育を考える」（朝日文庫）、村上淳一/ハンス・ペーター・マルチュケ「西ドイツ法入門」（有斐閣）



図書館に 思うこと

経済学部経済学科3年 山口浩次

小・中学校の時は本を読むのが好きで、昼休みなどに図書室に行ってはよく借りたりしたものであった。ジャンルには特にこだわることなく、ページをめくって興味を引いたものを読んでいた。だから、学校で読書感想文が宿題に出されても、スラスラ鉛筆を走らせることができた。でも、積極的に図書委員(係)に立候補するほどの本好き少年には及びもつかなかったが。

これが高校に入ってしまうと、あまり本を読まなくなり、自然と図書室からも足が遠のいてしまった。いわゆる若者の活字離れというもので、テレビや音楽の方に興味を持ってしまい、読書という、せいぜい雑誌を見るくらいであった。時々文庫本は買ったりしてはいたが、机の上に「つんどく」ありさまだった。

このように図書室とのつき合いも悪くなっていたが、大学に入ると、図書館へよく足を運ぶようになった。行かざるをえなくなった、と言った方が良いかもしれない。今迄とは違って、講義が専門的で、内容が高度化していくのに付いていくにしても、レポートの作成やゼミの発表準備をするにしても、自分の本棚だけでは到底間に合わなくなる。そうかといって、1冊何千円もする専門書を何冊も買えるものではない。そうなると、必然的に図書館で本を借りることになる。

本を借りるだけではない。旧図書館よりも広く明るくなった閲覧室で、良質化した机や椅子も講義の合い間に使わせてもらっている。席数は増えたが、試験前ともなると必死な学生で満席となるので座る場所がなくなってしまう。

1階では、自宅で取っている以外の新聞にも目を通して。特に大学生の常識とも言われている「日経」は見出しだけでも読んでおき、国内外の経済の動きを理解しようとしている。ここでは「朝日」の人气が高く、いつ行っても誰か彼か読んでいる。しかし、「ジャパン・タイムズ」にはあまりしわが見られない。

雑誌コーナーは、趣味的なものから専門的なもの

の迄種類が豊富なので、暇な時に色々と読んでいる。「週刊朝日」などは気楽だが、「エコノミスト」は肩ひじ張ってしまうのは私だけか。一部を除いては全館禁煙であるから、タバコを吸わない私にとっては唯一くつろげる場所となる。

こう考えると、図書館は実に便利なところだと言えるだろう。しかし、それでも物足りないと思うのである。1つはAV装置。これは早くから予定され、映像、音楽世代の我々学生の期待するものだが、今だに実現されていない。他大学では設置されているところも多いそうだ。今迄とは違った、新しい図書館の顔となるだろうから、早く導入して欲しいものだ。もう1つはコンピューターシステム。本をコンピューターに登録することにより、キーを叩いて画面を見るだけで本を探すことができるだろうし、図書帯出証(黄色のカード)を磁気化することにより、貸出し手続も簡単になるだろうし、貸出し本の管理も充実され、追跡調査も可能になると思う。2階出入口の「B.D.システム」だけにマイコンを使っているのではもったいない。

あと、これは我々利用する側の問題であるのだが、2、3階での飲食禁止。「飲食御遠慮下さい」の張り紙むなしく、ほとんど守られていない状況である。やはり、ここは常識として守るべきではないだろうか。それと、本への書込み、端の折り曲げもよく目にする。喫茶店と間違っているのではないかと思われるような話し声。これは、自分のことを棚に上げて言っているが、考えるべきものであろう。

使い次第で、もっと便利になるだろうから、図書館をより使いやすく、来やすくしてもらうのを望むと同時に、使う側も積極的に正しく使いたいものだ。小学校の図書室から始まった図書館とのつき合いも15年以上と長いものとなった。今後、お互い充実させて、より長くつきあいたいものである。

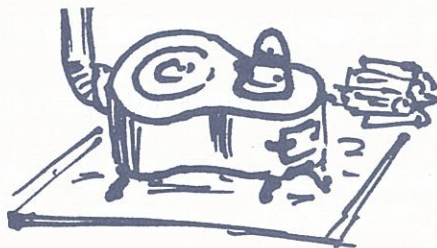
今回、北海学園大学図書館の方より原稿の依頼を受けたので、学生の側から図書館について思うことを若干の独断と偏見をまじえながら述べてみたいと思う。

私は現在4年生で、ちょうど前半の2年間を旧図書館で、後半の2年間を現図書館で利用してきたことになる。普通、極一般の学生にとっては図書館とは試験前に資料を読みにくるか、さもないければ公務員勉強をするために使われることが多いように思われる。このことがいいか悪いかは私にはわからないが(私自身、決して真面目な学生ではなかったから)、この2つの時期は私にとって最も居心地の悪い時期でもあった。思うに本学の学生にとって図書館とは本当の意味ではまだ定着したものとは言切れないのではないだろうか? 後輩たちの今後の利用に期待したい。

いきなり話が変わるが、私は大学で研究系のサークルに在籍していたため、活動に大量の資料を必要としたため、図書館はかなり頻繁に利用した方であると自負している。また、4年間を通して足を運んだ図書館は市立、道立はもとより、北大、商大、札大、藤女子大等、札幌市周辺の主な図書館にはほぼフォローしたのではないと思う。これにはなかなか苦勞もあって、空きカンを置き忘れて叱られた道庁経済図書室や、シスターの見張り付きで本を閲覧した藤女子大やホルマリンの匂いの中で白衣の学生に囲まれた札医大付属図書館など、はたから見ればネクラと言われそうなことにもそれなりに思い出はあるものである。そうしていろいろな図書館を排回してきたが、そうしているうちに私なりに各図書館のランキングというものができてくる。ここにはかなり強い偏見が入るが、一学生の世迷言と思って御了承願いたい。まず、蔵書数で言うならばベスト3は道立、北大、札大といった所であろうか。中央図書館は名前の割には蔵書はあまりなかったように思えた。施設の設備で言えば札大、学園、道立といったように思える。札大の図書館はさながら美術館



のような外装であった。では総合評価ではどこが1番であろうか? なんと答えは学園大の図書館である。これは決して自分の大学だから、とか本稿のためにごまをすっているわけではない。では何故学園か、というと、まず第一に蔵書である。単に蔵書数を言うならば、先程も述べたように北大の方が多いと思う。しかし、北大の場合、その蔵書の数多くが古い年代に出版されたものであり、昭和ヒトケタの本はあまり実用的とは言難い。また、札大は設備、蔵書ともに充実しているが、なんと夏期、冬期の休みの時期には閉館したままであった。しかも平常の閉館時間が午後4時までと聞き、(本当かどうかは私は自信はないが)あまり有効に使えるとは言えない。しかも道立は大麻という遠距離のうえ、開館時間が短い。商大や藤の場合は、単科大学という性格のためか(ひよっとしたら商大はあたらないかも知れないが)本の種類が限られており、多岐にわたる分野の研究をするためには実用性に乏しい。といった点を考えれば、学園大の優位性は明らかと言える。しかも学園の場合は夜の8時まで開館している、というのは非常に大きな魅力といえる。もしできるならば、開館時間のさらなる延長を期待したい。と、ずい分と学園大を「ヨイショ」してきたが、今後の図書館に求めることは、やはりさらなる蔵書の充実とサービスの向上である。特に後者は利用者の立場から言えば重要である。どんな貴重な文献も手にとって見なければなんの意味もない。今、私が1番求めるものは、これにつきると思えてならない。今後の図書館の発展に期待したい。



昭和62年度北海道関係受入図書(選)

- 菅江真澄と江差街道 小林優幸著 みやま書房
 東西蝦夷山川地理取調圖 松浦武四郎著 草風館
 北國より海峡の彼方 北海のたより 中山露伴編
 函館 〔7〕大盛堂
 枝幸郡アイヌ語地名考 新岡武彦著 北海道出版
 企画
 随想・はこだて散歩 NHK [日本放送協会] 函
 館放送局編 みやま書房
 アイヌ語地名資料集成 佐々木利和編 草風館
 規範北海道地方大地図 新日本教文株式会社編
 (同編者)
 北海道の山々 一写真集一 山口透 [ほか] 編
 北海道撮影社
 北の港町小樽 荒卷孚著 古今書院
 千島探検誌 1-3 郡司成忠著 復刻版 [発行
 所不明]
 樺太の話 中目覺著 三省堂
 樺太風物抄 谷内尚文書 七丈書院
 北海道の新しい姿 北海道廳編 北海道廳行政調
 査室
 統計数字が語る北海道の姿 一経済体質, 政治風
 土, 道民性, 会社地図一 岩崎正昭書 北海道問
 題研究所
 大地の樹 一北からの発言一 北海道編集セン
 ター編 (同編者)
 卓上四季一鳥影抄一 鳥井十三雄著 みやま書房
 戦後道政史 一歴代長官物語一 鈴木英一著 北
 海タイムス社
 新・開拓時代の自治体革新 横山桂次編著 あり
 えす書房
 ゲンダーヌ 田中 了 D. ゲンダーヌ著 現代
 史出版会
 東京発・北方脅威論 村井幸雄編著 現代の理論
 社
 焦点下の北方問題 東亞調査會編 東京日日新聞
 社
 空知集治監初代典獄 渡辺惟精の日記 一空知・
 宮城・三池監獄裏面史一 長谷川嗣編 北海道出
 版企画
 地域の社会・経済構造 一北海道余市町の研究
 一 地域問題研究会編 大明堂
 民衆史運動 一その歴史と理論一 オホーツク民
 衆史講座編 現代史出版会
 北の生活におくる 一新生活讀本一 北海道教育
 委員会社曾教育課編 (同編者)
 ものいわぬ娼妓たち 一札幌遊廓秘話一 谷川美枝
 著 みやま書房
 青年将校と慰安婦 一付・軍隊戯れ唄集一 谷川
 美津枝著 みやま書房
 教育の理想 一私たちの仕事一 谷昌恒著 評論
 社
 教育のなかのアイヌ民族 一その現状と教育実践
 一 井上司編著 あゆみ出版
 戦後北海道教育運動史論 鈴木朝英監修 あゆみ
 出版
 北海道教育史 昭和編 山崎長吉著 北海道新聞
 社
 子どもを主人公に据えた学校 北海道白老町立竹
 浦小学校研究・実践同人会著 明治図書
 開かれた教育 札幌市立丘珠小学校著 みやま書
 房
 生徒とともに考える日本の少年民族, 続 北海道
 高等学校教職員組合教文部少数民族専門委員会編
 北海道高等学校職員組合
 版画と子供たち 一ある開拓使一 今井龍男編著
 北海道出版企画
 人が好きになる子育て 一札幌・ばんけい幼稚園
 の自由な教育一 木村 仁著 一光社
 北大文武会事件の回想 一1928年の全学ストライ
 キの記録一 救仁郷繁著 みやま書房
 北海道植物教材図鑑 一山の花一 谷口弘一 三
 上日出夫編 北海道新聞社
 不自由をのりこえて 一肢体不自由児の作品集
 一 北海道真駒内養護学校編 北書房
 がんばれマーヤ 一精神薄弱化の社会に自立した
 記録集一 北海道精神薄弱児資料センター編 楡
 書房
 家庭教育を進めるために 一家庭教育学級運営の

昭和62年度北海道関係受入図書(選)

- 手引— 北海道教育厅社会教育課編 (同編者)
 阿夷奴研究 1～4 (1917.4-1918.5) [復刻版] みやま書房
- アイヌ学への歩み 藤本英夫著 北海道出版企画
 アイヌの国から —鷲塚鷲五郎の世界— 藤本英夫著 草風館
- アイヌの民俗 早川昇著 岩崎美術社
 アイヌの世界に生きる 茅辺かのう著 筑摩書房
 アイヌの生活と伝説 金田一京助著 国際観光局
 アイヌ沿革誌 —北海道旧土人保護法をめぐって— 喜多章明著 北海道出版企画
- 対アイヌ宣策法規類集 河野本道編 北海道出版企画
- アイヌ繪 越崎宗一著 復刻版 北海道出版企画
 北方の古代文化 新野直吉 山田秀三編 毎日新聞社
- ユーカラ物語 須知徳平著 ぎょうせい
 アイヌ文様 杉山寿栄男編 北海道出版企画
 北の工芸 杉山寿栄男編 北海道出版企画
 アイヌ伝承と砦 宇田川洋著 北海道出版企画
 アイヌ宣言 結城庄司著 三一書房
- 蝦夷風俗彙纂 前編, 後編 開拓使編 復刻版 北海道出版企画
- 北海道再発見 —歴史・伝説そして旅— 小寺平吉著 學藝書林
- 北海道の衣と食 渋谷道夫著 明玄書房
 札幌の食 いまむかし 茜会編著 北海道教育社
 ほっかいどう むかしのあそび 大槻文雄文 北海タイムス社
- 北方の神仏たち —庶民信仰のモニュメント— 小寺平吉著 學藝書林
- 北海道の歳時習俗 小寺平吉著 明玄書房
 北海道の祝事 —誕生・婚姻・年祝い— 矢島睿著 明玄書房
- 蝦夷風流譚 中村純三著 みやま書房
 むかし話北海道 [1]～5 日本児童文学者協会
 北海道支部編 北書房
- さっぽろの昔話 明治編 上, 下, 大正編 上 河野常吉 みやま書房
- 月へいった女の子 鈴木トミエ絵・文 北海道出版企画
- サケとわかもの —アイヌむかしばなし— 鈴木トミエ絵・文 北海道出版企画
- 鹿とサケと水の神さま —アイヌむかしばなし— 鈴木トミエ絵・文 北海道出版企画
- シュシュシナイの権六狸 高橋明雄著 みやま書房
- 新北海道伝説考 脇哲著 北海道出版企画
 北海道民謡の旅 田村白雨著 国有鉄道札幌地方営業事務所
- 旭川第七師団 示村貞夫 復刻改訂版 総北海道出版部
- カラー版 自然と科学 12,15 岩崎書店 12. 根室原野—春から夏へ— 15. 流水の世界
 知床の草木花 —花の樂園をたずねて— 荒澤勝太郎著 北海タイムス社
- Carl Johann Maximowicz 菅原繁蔵著 函館市立図書館
- 北海道の高山植物と山草 —新装版— 伊藤浩司著 誠文堂新光社
- 原色北海道のきのこ —その見分け方・食べ方— 村田義一著 北海タイムス社
- 北海道の自然 オンコ 斎藤新一郎著 北海道新聞社
- エキノコックス —その正体と対策— 山下次郎著 北大図書刊行会
- 森の昆虫誌 —北海道の自然を考える— 坂本与市著 未来社
- エゾシロチョウ 朝比奈英三著 北大図書刊行会
 北海道の蝶 永盛拓行 [ほか] 著 北海道新聞社
- サケ —母なる川に帰る— 桜井淳史著 平凡社
 北ぐにの鳥 斎藤春雄著 北海道新聞社
- タンチョウ —根釧原野に生きる— 林田恒夫著 平凡社
- 火の鳥 アカショウビン 嶋田忠著 平凡社
 キタキツネの季節 今津秀雄写真 偕成社
- 跳ベキタキツネ 竹田津実著 平凡社
 北海道産野ネズミ類の研究 太田嘉四夫編著 北

昭和62年度北海道関係受入図書(選)

- 大図書館刊行会
馬 —この素晴しき友— 八戸芳夫著 共同文化社
適応のしくみ —寒さの生理学— 伊藤真次著
北大図書館刊行会
食中毒の話 飯田広夫著 北大図書館刊行会
北海道の菓草 —家庭での育て方, 用い方— 三橋博 山岸喬著 北海道タイムス社
きけ炭鉱の怒りを —北炭夕張新炭鉱大災害の責任— 自由法曹団夕張新鉱災害調査団編 笠原書店
聞き書き 砂金掘り飯場 武井時紀著 みやま書房
北海道 山菜・きのこ料理の本 兵藤恭子 鈴木和子著 北海タイムス社
北海道の産業のあゆみ 朝日新聞社 北海道放送編 (同編者)
日本の生業 1. 北海道の農林業 2. 北海道の漁業諸職 明玄書房
菘の根は深く —屯田兵の妻たち— 扇谷チエ子著 ドメス出版
屯田兵村に於ける農地改革 —東旭川村実態調査報告— 北海道農地部編 (同編者)
農業経営の展開方向 —企業の経営を素材にして— 北海道農業経営研究会編 北海道協同組合通信社
北海道の農業の切断面 —その構造と特質— 北海道農業構造研究会編 (同編者)
北海道 園芸作業12カ月 荒井道夫著 北海道新聞社
北海道 家庭園芸一問一答集 荒井道夫著 北海道新聞社
北海道蝗害報告書 開拓使札幌勸業係編 復刻版 弘南堂
甜菜 細川定治著 養賢堂
花紀行 6. 礼文・利尻の花 7. 大雪山の花 文化出版局
北海道の花と自然 1—山野草と語る— 自然と親しみ, 自然を語る会編 すみれ書房
- 札幌の庭園 西村保五郎著 ノーム・ミニコミセンター
樺太林業史 樺太林業史編纂会編 農林出版
北海道の樹木 鮫島惇一著 北海道新聞社
北国の楽しみ 北海道の木の実 —見分け方から利用法まで— 山岸喬 山岸敦子著 北海タイムス社
北海道山菜誌 山本正[ほか]著 北大図書館刊行会
北の魚歳時記 達本外喜治著 北海道新聞社
日本におけるホタテガイ増養殖 —付 加工・流通— 境 一郎編著 水産北海道協会
北海道 駅名の起源 日本国有鉄道北海道総局編 (同編者)
間道を行け —彫刻とエッセイ— 米坂ヒデノリ著 北海道新聞社
彫刻詩集 札幌の彫刻をうたう 原子 修著 みやま書房
北海道 野外彫刻ガイド 原子 修著 北海道新聞社
写真集 北海道の円空仏 江差フォトクラブ編 みやま書房
小林金三画集 —小樽・街と家並み— 小林金三 絵・文 (小林静江)
日本のにしん漁 —樋口英夫写真集— 樋口英夫 写真 マリン企画
北海道の陶磁 箱館焼とその周辺 塚谷晃弘 益井邦夫著 雄山閣
映画と歩けばサッポロは 天知壮三著 みやま書房
映画 北の舞台 朝日新聞北海道報道部編 北海道教育新報社
聞きがたり北の大衆芸 川嶋康男著 みやま書房
北の昭和放浪芸 川嶋康男著 太陽
北海道ゴルフの歩み —グリーン物語— 小笠原勇八 福島 靖著 北海道新聞社
だれも言わなかったスキー術 —用具の選び方からハイテクまでエキスパートスキーの内側をさぐる— 伊藤龍治著 オーエス出版
北の魚 北の釣り —原生林・湿原・原野の川辺り— 名取武雄著 小川和夫画 JICC 出版局

昭和62年度北海道関係受入図書(選)

方言学 —講座— 4 北海道・東北地方の方言
 国書刊行会
 ほっかいどう語 —その発生と変遷— 北海道新聞社編 (同編者)
 北海道ことば風土記 岡田文枝著 みやま書房
 和人は舟を食う 知里真志保著 北海道出版企画

和愛辭典 金田一京助著 [発行所不明]
 アイヌ語入門 —とくに地名研究者のために—
 知里真志保著 復刻版 北海道出版企画
 クオンタインとシフク —長篇叙事詩— 富原孝著 鳥影社

新 着 雑 誌

[愛知大学] 一般教育論集 1 : 1988 / 5月+
 [愛知学泉大学経営研究所] 経営研究 豊田 ; 1
 巻1号 : 昭63+
 [朝日大学] 朝日法学論集 1 : 昭63 / 7月+
 [中央学院大学法学論集] 1 : 1987+
 外交フォーラム 第1巻1号 : 昭63 / 10月+
 学習院大学大学院政治学研究科 政治学論集 創
 刊号 : 1988 / 3月+
 鹿児島経済大学社会学部論集 6巻4号 : 昭63 /
 2月+
 官報別外 : 参議院会議録 [M・F版] 第1回 :
 昭22 / 5月~12月—第69回 : 昭47年7月
 官報号外 : 衆議院会議録 [M・F]
 第1回 : 昭22 / 5月~12月—第69回 : 昭47年7月
 関西大学法学研究所報 1 : 1987+
 [近畿大学教育研究所] 教育研究紀要 14 :
 1988+
 空法 (日本空法学会) 1—22 / 23 : 昭30—昭56,
 27—29 : 昭61—昭63+
 久留米大学法学 第1巻1号 : 1988+
 九州東海大学産業技術研究所所報 1—3 :
 1985—1987+
 明治学院大学法律科学研究所年報 4 : 1988+
 [奈良産業大学] 奈良法学会雑誌 1巻1号 :
 1988+
 日本農業研究所研究報告 : 農業研究 1 : 1988 /
 9月+
 労働文化 (北海道労働文化協会) 90 : 昭63 / 1

月+
 専修法研論集 —専修大学大学院紀要— 1 :
 1987 / 9月+
 ソ連・東欧学会年報 14—15 : 1985—1986+
 [玉川大学] 体育研究紀要 1 : 1987+
 [東北薬科大学] 一般教育関係論集 1 : 1987+
 東海大学短期大学部生活科学研究所所報 1 :
 1987+
 早稲田大学人間科学研究 1巻1号 : 1988+
 American journal of science. New Haven,
 Conn. 288 : 1988+
 The Controller. (Contorollers Institute of
 America) New York.
 2(4—13) : 1934. 3—26 : 1935—1958
 Earth surface processes and landforms : The
 journal of the British Geomorphological
 Research Group. Chichester, Sussex. 13 :
 1988+
 Politische Viertel jahresschrift. Opladen 1
 —28 : 1960—1987+
 Public law. London. 1988+
 U. S. News & world report. Washington, D. C.
 105(10) : 1988 / 9 +
 Vanderbilt international. Nashville, Tenn. 1
 —4 : 1967/68—1970/71.
 Vanderbilt journal of transnational law. Na-
 shville, Tenn. 5—18 : 1971/72—1985, 21 :
 1988+



北 駕 文 庫 其 の 三

てんけいわくもん
天経或問
古文書解題

早 川 和 夫

1675年(延宝3年)の数年後、新進の暦学者・渋川春海(1639~1715)は、ひそかに中国から1冊の天文書「天経或問」(てんけいわくもん)を入手し、はじめて日本人の手になる貞享暦(じょうきょうれき)を作りました。

当時の暦法は862年に採用された宣明暦ですすでに800年を経過し、暦の冬至日は2日遅れていました。このことは日食が予定日より早く起ることからも指摘されていたのです。

春海は改暦のために1.5メートルの棒を立て、影の長さが一番長くなる日を冬至日に定めようとしたのですが、影の先端はぼんやりして最長の影の日はきめられませんでした。

春海は冬至予定日の前後に同じ影の長さになる日時を観測し、その中間日を冬至とする5世紀の中国暦学者・郭守敬(かくしゅけい)の中間法を取り入れ、1673年(延宝元年)に最初の改暦を申し出たのですが、その年の5月の日食予報に失敗しました。その理由は冬至点と近地点(地球が太陽に近い点)が一致しないことを春海が知らなかったことによると言われています。

この春海の苦境を救ったのが天経或問だったと言われています。彼はこの本を読み、太陽が冬至点を通過した6日後に近地点を通ることを知り、正しい暦を予報することが出来たと伝えられています。

この歴史的名著「天経或問注解」は北駕文庫の理工図書の中に含まれています。全部で3分冊となっていて享保15年(1730)に、大阪の心齋橋通北久太郎町の大坂書房から出版されました。著者は中国の游子六、解説は日本の西川正休となっています。いわばこの時代の通俗天文解説書だったのでしょう。

宇宙の構造図など図示されていますが、言うま



でもなく天動説で地球が宇宙の中心に位置し、その外に月、太陽、惑星があり、その外に恒星があります。この地に北天の星座と、南天の星座が画かれています。

日食や月食の図もありますが、地球が中心にあつての日食図、月食図ですから奇妙なものです。

参考文献として中国古来の天文書81冊、中国の天文家149名の氏名が挙げられています。こうしたことから天経或問は東洋天文学の歴史を知るために、貴重な文献であるということが出来ます。

(はやかわ かずお 工学部教授)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol. 10 No.3 (通巻107号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814